

事故なくす決めては一つ「無理」するな

交通安全週

九州木

世界平和の裏には、交通戦争という共通の悩みがあります。交通事故は、予告なしに起きて、私達の幸せな家庭生活を無惨にも不幸の底に落してしまいます。被害者も加害者も生涯自分の人生を変えてまいります。子供を亡くして茫然として美に悲惨な事態を引き起こします。交通事故で、両親を失つた幼い子供達、又、両親を失つた年老いた両親。これらは安心して歩くことも出来ない状態です。

「昨日は人の身、今日は我が身。」との諺の如く、事故が我が身であつたらと思うと、身震いがします。運転者だけが悪いとはいえないませんが、無理な追越し、無謀なスピード、身のほども知らない飲酒運転に私は安心して歩くことも出来ない状態です。

立ち話の中に「自動車を貰う時は大きな車を貰おう」との諺の如く、交通事故を起した時に、怪我が軽くてすむ。」との話に、事故を予算に入れて車を買つかと思うと、腹立たし

立つのかと思うと、腹立たしました。

「あ!!危い」と言う前にもう終つているような交通事故。交通戦争とまで言われる現代、私の親類からも

その戦争の犠牲者が一人でました。まだ最近のことです。この事は、私に身近にある交通事故というものを強く感じさせられました。

二、運転者の無謀な運転、歩行者の不注意。

三、運転者の無謀な運転と四つ程上げてみました。そしてこの四つを社会的なもの（一、二）、個人的なもの（三、四）の二つに分けてみました。

まず、社会的なものから

交通事故をなくす

門中三年

「あ!!危い」と言う前に

立つのかと思うと、腹立たしました。車の急激な増加によるもの。

一、その増加に追いつけない交通施設の不足。

二、運転者の無謀な運転

三、運転者の無謀な運転と四つ程上げてみました。そしてこの四つを社会的なもの（一、二）、個人的なもの（三、四）の二つに分けてみました。

交通安全週間に思う

九州木産社運転者部会

い思いにかかりたてられます
私の上司の人の話に、週間を習慣づける事を教えられました。交通安全週間を行なった対策もなく、唯個人の注意に頼る外、どうすることも出来ない現状です。
私達、九州木産社運転者部会は、こうした個人の注意を主にして、会員一同、個々の協力のもとに安全を呼びかけ、交通安全週間を習慣づけています。交通事故は、運転者の注意だけで防げるものではなく、家族の愛情のもので事故防止が出来るのではないかでしょ
うか。「気をつけてね。」といふ愛の一言は、急ぐ気持ちを落ち込ませ、安全第一の運転が出来る事と確信していきます。
明るく幸せな家庭を築くためにも、毎日の生活中に交通安全の意識向上を深め、住み良い郷土づくりに努めたいと思います。
九州運転者部会員より

が進み、普通の道路でも一台の車でふさがつてしまいそうです。そこで考えたいことは、車の数を減らして増加のための混雑による事故を少なくてきないかということです。今でもノーカーディンとか、歩行者天国という事を行なっています。でもこれだけでは一日限りになってしまいます。通勤に使用したりでしかたがないかもしませんが、それでも一ヶ月間で三分の一でも車を利用したいものだとあります。ほんの何百メートルしか行かないのに車を利用するのはどうかと思います。

交通安全と言ふ言葉は日本人の合言葉とも言えます。人間が口に出すその葉の中には、一口に言えども辛苦の悲しみをしてゐる。交通事故への怒り、ほど遠い事故のない平和な日本を願つての祈りを、どうぞ日本の國、門川の町に咲くせてくれないのか、この標づついろいろな対策が施されてゐるが、頭をかげることが多い。今までに、どんな対策がされた来たかと、考へる。「これ」といつた事故防策は実施されてないよう思われる。実施されていても、それ完全でない為に考へても、は

交通安全について

門農金井喜代子

農金井喜代子

について

出でこないのであるう。これがいかにむずかしい問題であるかがわかる。

カーブミラーが立てらる国道には、歩行者専用線が引かれ、横断歩道には、「横断歩道です」と表示される形が描かれ、走り注意、一旦停止を示されされている。こんな事故防止の呼び声である。その呼びかけはどれほど効きめがある。それを見て、自分に「付ける」と言い聞かせると、無茶な運転、居眠り、これが、呼びかけを、している事実なのだ。眠たければ、車を止ひと眠りするとか、酒を飲んで車を運転するなど、何人いるのだろう。みんなが安全が作つて毎日を楽しく暮らしてゐています。それが、呼びかけを、してゐる事実なのだ。

車致しましよう。明る川町を作り、健康な家作つて毎日を楽しく暮らに行くには、まづ安全が第一です。それは他人は作れません。自分が

道での遊びは

や

西門

学校に行く時、わたしたちは、「ばか」といふふりで、二年生のとも子さんたちと一緒に遊んでいました。そして、とも子さんがしをおしたので、私は洋服の中に出ました。その時、どうしやが来ていたのです。わたしはびっくりしてどうしておしたのね。そしてくるまでにのつてゐる人は、「ばか」といふふりした。わたしは、一回もひだりや、道での遊びしたことないのに、学校のまりややぶつたこともなかったのにと思いました。わたしは、とも子さんによきいてみたら、ともことはさつきよりもへんな顔をしていました。わたしは、「もうあんなことはしかしね。わたしはいやな髙揚感も全然ありました。」「なんだから。」とに

An illustration of a vintage-style car with a large front grille and round headlights, driving towards the viewer on a road. The background shows a simple landscape with trees and a horizon.